

四、神宮紙誕生後の展開

ー 洋画用キャンバス紙の開発 ー

一 キャンバス紙の代用品

神宮紙の成功によって、土佐和紙に関心を持つ画家が現れる。その背景には昭和初期、主にフランスから輸入されていた油彩画用キャンバス紙の入手が困難な状況があったこともあり、代用品の開発が急務であった様子が伺われる。

二 キャンバス紙の開発

洋画家・和田三造（一八八三～一九六七）は洋画用キャンバス紙の開発を中田製紙工場に依頼している。和田は聖徳記念絵画館の「大葬」を描く際に、神宮紙に油彩画で描いており、油彩画による和紙の可能性を感じていたことが推測される。

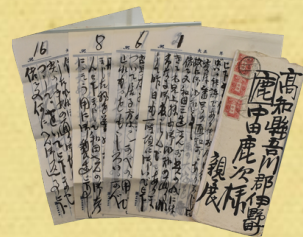
和田は、東京の紙商・中田治三郎に、希望する紙質を具体的に指示。その内容を、治三郎もしくはその弟である梅治が、土佐の中田鹿次へと書き送り、試作品の製造を求めている。

三 キャンバス紙の商品化

昭和初期、洋画家たちは麻キャンバス紙の代用品としての土佐和紙に関心を示していた。昭和二年（一九二七）には「中田紙」と命名して広告が出されており、広く販路を開拓しようとしていた。このように、神宮紙の開発をきっかけに、和紙はキャンバスを代替し得る油彩画用の支持体として改めて可能性を見出されていた。



「大葬」
和田三造
昭和8年（1933）
279.5×218.6 cm
紙本油彩（神宮紙）
（聖徳記念絵画館所蔵）



和田三造との書簡
大正15年(1926)



キャンバス紙

番外編

高知県内の日本画用和紙の系譜

中田製紙工場の廃業によって神宮紙の系譜は一旦途絶えたが、高知県内では確かな技術への期待を受け、主に下記の和紙開発の展開があった。

一 高知麻紙（こうちまし）

昭和五十年（一九七五）頃、版画用紙から日本画用雁皮紙や古文書修復用紙などを手掛けていた尾崎金俊氏は、大麻や芋麻の処理に着手。数年を要して高知麻紙、その後雁皮を配合した日本画用紙などを開発・市販して現在に至る。

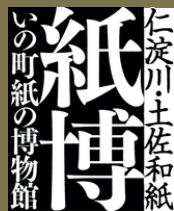
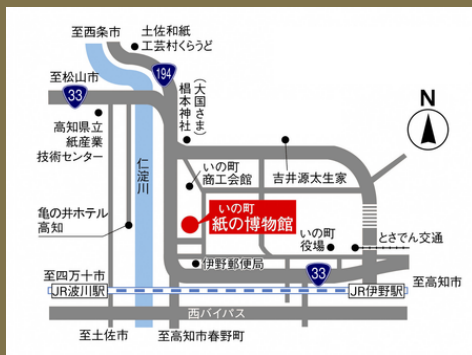
二 大演紙（おおはまし）

良質の原料、確かな技術に加え、文化財修復分野のアプローチの観点から大川昭典氏（元高知県立紙産業技術センター）、国内産原料にこだわって生産していた鹿敷製紙（当時：濱田佳世子代表）が連携して生産し、その紙は大演紙と命名された。神宮紙の精神に則ったと思われるように、原料は楮主体に雁皮が配合され、現在入手可能な良質原料と製法で生産された。現行の市販品との耐久性試験の比較では最も安定した数値を示したと評価された。

【協力】
明治神宮外苑 聖徳記念絵画館・佐藤 志乃（公益財団法人 横山大観記念館）

- 【主要参考文献】
- ・荒井経「日本画と和紙ー壁画用紙の系譜」『和紙に魅せられた画家たち』（明治神宮、平成23年）
 - ・佐藤志乃「大正期の紙本墨画と岩野平三郎」『和紙に魅せられた画家たち』（明治神宮、平成23年）
 - ・松尾敦子「一九二〇～三〇年代の日本画の基底材についてー製紙家 中田鹿次と岩野平三郎を中心にー」『美術史』第百五十六冊（平成16年3月）
 - ・『明治神宮外苑史』（明治神宮奉賛会、昭和12年）
 - ・「ジャンボ・ペーパー」『土佐物語』（朝日新聞高知支局、昭和49年）
 - ・和紙講演会「麻紙について」『百万塔』第50号（公益財団法人紙の博物館、昭和55年）
 - ・青山大和「ー蘇った「神宮紙」を高知県吾川郡いの町に訪ねてー」『神園』第15号（明治神宮国際神道文化研究所、平成28年5月3日）
 - ・いの町紙の博物館『土佐の紙大演紙に描いた日本画展』第1回（平成20年）、第2回（平成21年）、第3回（平成22年）図録
 - ・小林良生「土佐に誕生した大演紙を巡ってー土佐と越前における日本画紙の歩みの中でー」『百万塔』第135号（公益財団法人紙の博物館、平成22年）

※本冊子は令和6年11月～令和7年2月に開催された企画展「神宮紙誕生100年記念展ー絵画を支えた究極の土佐和紙ー」の内容を一部抜粋して掲載しています。



〈アクセス〉
JR土讃線「伊野駅」から徒歩10分
路面電車「伊野駅」から徒歩10分
車「伊野IC」から約10分
駐車場無料（大型3台・普通50台）

〈住所〉
〒781-2103
高知県吾川郡いの町幸町110-1
TEL: 088-893-0886
FAX: 088-893-0887
MAIL: tosa.wasi@bronze.ocn.ne.jp

紙博公式LINE



紙博HP



絵画を支えた究極の土佐和紙

いまでも現役、「耐久不変」の巨大和紙。

土佐の先人が挑んだ、究極の紙づくりに迫ります。

「神宮紙」は大正15年(1924)、伊野町(現いの町)の中田製紙工場で試作第1号が誕生し、描かれた作品は現在でも聖徳記念絵画館(東京都新宿区)に飾られています。「古代に逆のぼれば彼の藤原時代の京都紙屋院にて行われた製法と変わりなく・・・現在最優等の日本紙と断定する」と評価されており、いまでも誇れるいの町が生んだ紙といえます。

中田製紙工場の跡地の一部は当館であり、関連資料も多数所蔵している縁もあることから、誕生100年を記念して令和6年11月～令和7年2月の期間、「神宮紙誕生100年記念展ー絵画を支えた究極の土佐和紙ー」を開催いたしました。本冊子ではその展示内容の一部を抜粋してご紹介しています。

明治時代以降、時代が求めたさまざまな紙を開発し続けてきた土佐ですが、神宮紙は文化芸術分野において、絵画の表現展開に大きく貢献した紙でした。土佐の先人が挑んだ究極の紙づくりについて、知っていただく機会になりましたら幸いです。

令和7年3月吉日
いの町紙の博物館 館長 平尾 里枝美

神宮紙抄造再現の様子（昭和初期）
※左から3人目は中田製紙工場経営者の中田鹿次



一、神宮紙の誕生地

―伊野・中田製紙工場―

一 創業者、中田鹿次

中田鹿次(なかつしかじ)
(本名…千頭鹿次(ちかみしかじ)・一八七二〜一九五〇)は、高知県伊野町(現いの町)に生まれた。実兄が東京で紙商を始めたのを機に、明治三十三年(一九〇〇)、伊野町において中田製紙工場を設立。



二 特殊紙の中田

中田自身、熱心な製紙研究家で、機械漉きによる量産が主流になりつつある中で、あくまでも手漉きによる良質の特殊紙の開発を行っていた。卓越した技術は以前から認められており、中田が抄造した紙は、各種博覧会で受賞を重ね、皇室へ改良書院紙である八千代紙や菊の紋章入りの褒賞用紙を納めていた。

三 中田の 商売スタンス

実兄の中田治三郎と弟の梅治は東京・日本橋で紙商を営み、鹿次の漉いた紙を販売しており、札幌と大阪にも支店があったという。鹿次自身は経営者というよりは研究者としての印象が強く、高知の工場から離れることはほとんどなく、営業活動の他、経理に関しても東京で紙商を営む実兄らに任せていたという。

四 絶えた製紙技術

特殊紙開発のための投資を惜まず、採算を無視した抄造活動を続けていた中田の工場は、第二次世界大戦より経営が悪化。そして、昭和二十五年(一九五〇)、中田の没後、倒産した。生前、中田は紙の技術が他へ漏れることを懸念し、技術的な記録を残さなかったと云われている。さらに後継者がいなかったことも影響して、神宮紙をはじめとする中田の開発した製紙技術も絶えることになった。

中田製紙工場集合写真
昭和十年(一九三五)



中田製紙工場関係資料

現在、中田製紙工場関係の資料は紙の博物館で収蔵している。それらは、中田鹿次の息女の千頭昭子氏や、同工場で工場長を務めた片岡光好氏の孫にあたる片岡純一郎氏から多くが寄贈された。また、当初は高知県紙業試験場で受け入れていた神宮紙や紙漉き桁も当館で収蔵している。



紙干し場



紙漉き場

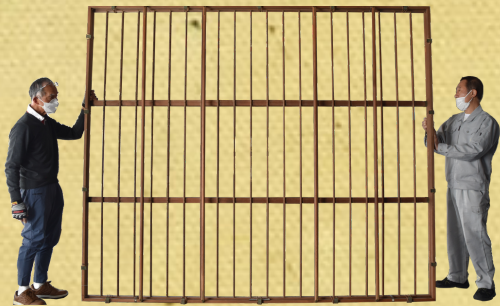


昭和のはじめ頃(1920年代後半)、伊野町の市街地を北向きに撮影した様子。(写真奥は加茂山)
紙干しをしている付近一帯はほとんどが中田製紙工場と思われる。後年、紙の博物館も跡地の一部に建つことになる。

―美術史の観点から―

一 日本画 支持体の変化

日本画を描く支持体としては、明治から大正にかけて、主流は絵絹絵を描くための絹布であった。この状況が変化を見せ始めたのは大正時代末期ごろであった。耐久性に優れた支持体となり得たことが、和紙に注目が集まったひとつの要因であった。



壁画用紙製作用に使われていた紙すき桁

大正末期以降、聖徳記念絵画館に代表されるように、西洋風の大規模な展示会場が登場し、それに伴って展示する絵画も多く描かれるようになった。大画面に映えるインパクトのある色彩も同時に求められるようになり、厚塗りできる和紙が注目されるようになる。当時の製紙技術では伊野村の吉井源太が開発した大型簀桁である三六判(約〇・九m×一・八m)が最も大きなサイズであったため、大作を描く場合は紙をつなげる必要があった。これらの条件を満たす世界最大の手すき紙として誕生した神宮紙は、大変画期的であり、越前の岩野平三郎らの和紙開発にも刺激を与えていくことになる。

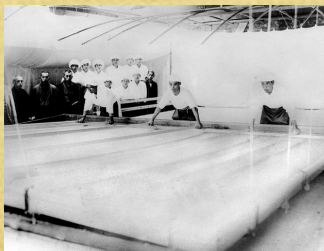


聖徳記念絵画館に納めた神宮壁画用紙 (290×270cm)

二 時代が求めた 耐久性・大きさ



三笠宮崇仁親王(左から4人目)の行啓 昭和10年(1935)



神宮紙抄造の様子

三 神宮紙の評価

神宮紙は上記の美術界の時代の要請によって求められた紙を体現したものである。誕生した大正時代後期の神宮紙の開発以降、日本画の支持体としての和紙の価値が高まり、ひいては和紙全体の地位向上につながった。

八千代紙

大正6年-昭和20年頃(1917-1945頃)

大正6年から中田製紙工場で抄造された良質の和紙で、ミツマタを原料とする。皇室で使用する紙として山内侯爵家を通じて献上された。



神宮紙の特徴

1. 大きさ(当時世界最大)
2. 耐久性(絵具の保持にも耐えられる頑丈さ)
3. 不変性(年月を経ても劣化の少ない保存性の良さ)

二 展示壁画 支持体

館内に展示されている壁画は全部で八十点(日本画四十点・洋画四十点)あり、明治天皇の在位した幕末から明治時代の重要な場面を念な調査を行い、史実に基づいて描いたものである。

絵画寸法は縦約三m×横約二・七mと巨大で、延べ二五〇mの壁面を埋め尽くすように展示されているため「絵画」ではなく「壁画」と呼ばれている。

三 壁画に使用した 支持体

壁画に使用される支持体は和紙(神宮紙)かキャンバスの選択制であり、和紙は日本画三十五点、洋画二点に使用されている。また、日本画は岩絵具(天然の鉱石や鉱物を砕いて粉状にし、膠などの接着剤と混ぜて使用することもあり、壁画の重量は六十キログラムほどとなり、重量はもちろん、湿度の変化にも耐えることのできる長期間の耐久性が求められる。



「内国勲業博覧会行幸啓」
結城 素明 昭和11年(1936)
272.7×252.4cm
紙本(神宮紙) 著色・岩絵具
(聖徳記念絵画館所蔵)



「大政奉還」
邨田 丹陵 昭和10年(1935)
278.7×258.5cm
紙本(神宮紙) 著色・岩絵具
(聖徳記念絵画館所蔵)

三、神宮紙の舞台

―聖徳記念絵画館―
せいとくきねんかいがく

施設写真：聖徳記念絵画館所蔵



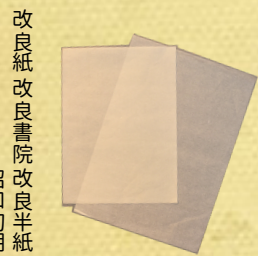
外観



中央大広間



展示室



改良紙 改良書院 改良半紙
昭和初期